

---

# 【想愛・二人の物語】

GAIYA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【想愛・二人の物語】

### 【Nコード】

N1568B

### 【作者名】

GAIYA

### 【あらすじ】

篠宮佐理と星河希恭は、私立紫苑学院に通う高校生。親友だった二人はある事をきっかけに不仲に：佐理と希恭の想いが交差を繰り返しながら：切ない物語を紡いでゆく。

## 序章・夢

僕は夢を見ていた……

何時もの…あの夢を……

僕の心の奥の

暗闇に潜む…あの…

忌まわしきものは

眠りの扉をこじ開けて

夜毎夢を訪れる…

そう……

僕を痛めつける為に……

## 夢

「佐理…佐理…」

柔らかな希恭の呼び声に誘われる様に、

僕は…夢の中で

ゆっくりと目を覚ました。

すると、目の前の暗闇に浮かび上がる様に希恭が立っていて、悲し気な眼差しで僕を見詰めている。

僕は何か言おうとしたが、何故か…声が出ない。

希恭は少しだけ微笑むと、僕に背を向けて歩き始めた。

狼狽する僕を其処に残して…

「い…くな…恭…」

僕はやつとの事で声を絞り出した。

其でも尚、希恭はゆっくりと遠ざかって行く

「行かないでくれ…恭ッ!!」

そう言いながら差し出した僕の腕を、誰かが不意に掴んだ。

僕はハッとして、その手の主の方へ眼を遣ると、其処に…意味有り気な笑みを浮かべた葉月が立っていた。

「葉月さん…どうして…?」

僕が驚いていると、葉月は

「どうして…? お前が俺を呼んだんだろ?」

と言って又ニヤリと笑った。

「そんな…」

「俺が——やるよ、お前に……」

「何…を…?」

「欲しいんだろう? ——お前に——やる…」

僕は大きく見開いた眼で葉月を見た。

すると、葉月は、

「繋いでおきたいんだろう? ——彼奴を……」

と言いながら、僕を見詰めた俣、希恭の方へ顎を杓って見せた。

その葉月に釣られる様に去って行く希恭へ視線を移すと、僕は苦し気に眉をしかめる。

「さあ…」

葉月は掴んでいた僕の手首を反して目の前に示すと、何時の間にも手に為たのか、鋭いナイフの刃先を動脈の通っている辺りへピタリと付けて、もう一度

「さあ、此れを。」

と促す。僕が改めて葉月の顔を見直すと、葉月は優しく微笑んで頷いた。

恐る恐るナイフを手にした僕の耳に、又、葉月の声が響く。

「さあ…其を此処に突き立てるだけで良い。」

葉月の言葉は、まるで魔法の呪文の様に僕の体を操り、抗がう事を許さない。

僕は、葉月に言われる俣、左の手首にナイフを突き立てた。

途端に鮮血がほとばしり、激痛が軀を突き抜ける。

其でも、まだ——夢は覚めない

僕はナイフを放り出し、とっさに傷口を握り締めた。

その指の隙間から流れ出る鮮血は、床に落ちると、一本の筋となり、遠ざかる希恭の後を追う様に真っ直ぐに延びて行った。

「恭…駄目だ…其処に居ちゃ…いけない…」 痛みを堪えながら、消え入りそうに弱々しい声で呟いた僕の言葉は、何も知らない希恭の耳に静に届けられ、希恭はゆっくりと僕の方へ振り返った。直ぐ側まで、赤い筋が迫っている。

「恭ッ逃げろ!!」

僕は言った。

しかし、其は無駄だった。

僕の見ている前で、希恭の足元へと辿り着いた赤い筋は、幾筋に

も分かれ希恭に襲い掛った。

「恭——ッ——！」

僕は叫んだ。だが、その声はもはや希恭には届かなかった。

目の前の光景に、僕の中の全ての音は奪われ、全ての事が恐ろしい程の静寂の中で進んで行った。

僕はもはや：只の傍観者でしかなかった。

赤い筋は、まるで生き物の様に次々と希恭に纏わり付き、瞬く間にその腕を、脚を、絡め取っていった。

（違う：僕は：こんな事望んで無い：こんな事：望んでなんかいない……）

身悶えする様な、僕の：声の無い叫びが、ゆっくりと静寂を破り、呼び戻された全ての音が：怒濤の如く一気に僕の内へなだれ込んで来る。

希恭の弱々しい息遣いも、赤い血のうごめく様な音さえも、鮮明に僕の元へ集まり：僕を打ちのめした。

「僕が望んだものは、こんなじゃ無い、こんなものじゃ無いッ——！」

僕は目の前で起きている出来事を、必死で否定する様に首を横に振り、暗闇を振り仰いだ。

止め処なく流れる涙に瞼を閉じ、眉をしかめる僕の耳に、又：声が響く。

「何が望みだと言うの……？ お前の望むものなんて：誰も与えてくれないのに……」

次の瞬間、

突然、衝撃が走り、僕は見えない壁に押し付けられていた。

苦しさに薄らと瞼を開けると、其処に居る筈の葉月の姿は無く、その代わりに暗闇から唐突に現れた様な二本の白い腕が、僕の喉元へと延びていた。

僕はその手の主を見定め様とした。

しかし、その必要は無かった。

そう…僕は既に知っているのだ、この光景には見覚えが有る、僕の内の忌わしき記憶が、暗闇の中にじわじわと其を象作りながら甦り、僕は呟く

「母…さ…ん…。」

暗闇に浮かび上がった、母、麗華の白い顔は微笑んでいる。

しかし、その優し気な表情とは裏腹に、白く延びた手は、容赦無く僕の首を締め付け――僕は苦しさにあえいだ。「母…さ…僕…は…母さん…を…愛…して…た……」

「嘔吐きね。」

母は微笑んで言った。

「嘘じゃ…無い……」

僕は、かすれた声で途切れ途切れに、其れでも…必死で自分の気持ちを伝え様とした、いや…伝えたかった…

「いいえ、お前は嘔吐きだわ、お前は私を愛してなどいなかった、

お前は誰も愛せないのよ、自分自身でさえ愛せない…哀れな子…」

母はそう言って、又ニツコリと笑った

（違う…僕は愛してる…こんなにも…）

伝わらない思いのもどかしさに、僕は又涙した。

「お前は嘔吐きで臆病な――汚らしい偽善者だわ、生きる価値も無い…。」

母は冷ややかに微笑むと、その手に一層力を込めた。

僕の思いは既に言葉にならなくなっていた。

深い悲しみは僕の体から力を奪い、抗う事はおろか、母を止める事さえも叶わない。

其れでも…

はぐれて行く意識を辛うじて繋ぎ止めながら、僕は最後の気力を振り絞り、糧なる者に救いを求め様とする…

「きよ…う…」

「まだ分らないの？誰もお前を助けてなんかくれないのに、あの子でさえ…ご覧なさいあの子を…」

母は心は死人の様に冷たく…僕はその冷たさに凍え、身を震わせた。

僕は、言われた通りに母の視線をなぞり、その先に居る希恭の姿に目を移す。

「あの哀れな姿を…お前はそんなに綺麗な顔をして、平気であの子を裏切った。其れなのにまだ…あの子に…救いを求め様と言うの？虫の良い話ね……」

「ち…が……」

「何が違うの？これはお前が望んだものの結果！」

「ちがう……」

僕は必死で声を上げる

「お前の醜い心が求めたものの報い！」

「違う…」

「いいえ違わない！あの子はお前の醜い心に囚われて、息も出来ない程苦しんでる…ほら…お前の醜い心があの子を呑み込んで行く…」

「止め…ろ…」

「お前は…仇なす者。」

「止めろ……」

僕の言葉は暗闇に虚しく響き、希恭に纏わり付く赤い筋は、僕の願いを嘲笑うかの様に、次々と増殖を続けながら希恭を呑み込んで行く

「止めろ…止めてくれ……」

僕は母の手から逃れ様ともがくが、母は僕を逃さない。決して…あの日と同じ様に…僕を…僕の心を解放してはくれない……

そして……

残された僅かな隙間から覗く希恭の唇から、微かに漏れた僕を呼ぶ『声』を最後に、希恭の全てが呑み込まれると同時に、僕の心は暗闇に押し潰されて心の底から叫ばずにはいられなくなる「恭おおゝゝッうあああああ——ッ！！」



僕は絶叫した。

その瞬間、母も、希恭も、夢の中の全てのものは消え失せ、僕は…現実へと引き戻される。

そう、何時もここで目が覚める。

起き上がったベッドの上で

僕は、涙で濡れた頬を拭いもせず…目覚めても尚、胸に残る痛みを抱えた俤…その痛みごと自分を抱き締める

夜の帷のなか…息を殺し…独りぼっちで肩を震わせながら…

そして…願う事は…

## ビジル

閉ざされた窓の向こうの廊下に、忙しなく行き交う人の気配が溢れ、午後の日差しが差し込む校舎のあちら此方にも、ざわめきが広がりはじめた。

終令のチャイムが鳴って暫く経つというのに、このクラスでは今、漸くホームルームが終ろうと為っていた。

「其では、週末迄に各自考えをまとめておく様に！」  
担任がそう締め括った。

「起立！！」

直ぐにクラス委員が号令をかけると、全員が立ち上がる、そして「礼！」

と言う合図で一斉に

「有難うございました！」

と頭を下げた。

担任が出て行くと、教室の中は途端に騒がしくなる、まるで、解き放たれた子犬さながら：と言った所だ。

「恭、急ごう、遅くなった。」

篠宮佐理はそんな級友達をしり目に、急いで荷物を鞆に詰め込んでいる親友の星河希恭ほしかわききょうに声を掛けた。

「うん。」

希恭がそう答えると、二人は連れだって教室を後にした。

二年の教室が並ぶ南校舎の二階から、人気の少ない正面の本館へ、二人はその先にあるビジルの会の部室に向かっていた。

ビジルの会は表向き社交倶楽部と言う名目になっていたが、その実態はこの〈私立紫苑学院〉を牛耳るエリートの集まりで、そのメンバーに選ばれるとゆう事は、支配階級の特権を与えられる様なものなのだ。

二人共メンバーの一員で、集会へ行くとところなのだが、ホームル

ームが長引いた為に遅くなってしまったのだ。

先にドアノブに手を掛けたのは佐理の方だった。

静かに開けたドアの僅かな隙間から体を滑り込ませると、希恭が後に続くのを見届けてから音を立てない様にソツと後ろ手にドアを閉めた。

「遅いぞ。」

奥の中央に有る大きな机に向かって座って居る会長の葉月唯やつきゆいが二人を見咎めて言った。

「申し訳有りません。」

佐理は言い訳をするでも無く、只一言だけそう言うと、軽く頭を下げ、希恭も其れにならった。

「其じゃあ、始めようか…？」

葉月が佐理の顔を見詰めた俛、ニツコリ笑って言った。

（お遊びが…始まる…）

頭の何処かをそんな言葉が過ぎり…

佐理は飽くまでも無表情に視線を落とした。

中央に作られた空きスペースに一脚の椅子が置かれ、其処へ一年の米倉と言う生徒が引き出された。

「座りたまえ、米倉君。」

葉月の右手に立っていた参謀役の皆川が、どうして良いのか分からない俛オドオド為ている米倉に向かって、優しい口調で言った。

米倉が言われる俛椅子に座ると、窓に暗幕が引かれ、部屋の中は暗闇で覆われた。

「ひいゝゝッ！！」

米倉が泣きそうな悲鳴を上げた。

直ぐに一つだけ裸電球が灯けられ、スポットライトの様に米倉の姿を照らし出し、米倉は少し落ち着きを取り戻した。

「今日のターゲットは一年の米倉君だ、そして、出題者は…」  
そこまで言った皆川の言葉を引き継ぐ様に葉月が

「俺だ。」

と続けて立ち上がった。

其から机の前へ回ると

「さてと、今回の課題だが…」

と言いながら、米倉の方を向いて机に腰掛けると、先を続ける

「月曜の夜明け迄に、礼拝堂の入口に生物室の標本を吊しておく事。」

「そんなッ：！！」

米倉が大きな声を上げた。「そうだな、標本は胎児の標本が良い。」

葉月は米倉の様子など気にも止めずにそう言った。「課題には二つのルールが有る。」

今度は皆川の反対側に居た相田が前に出て来て言った。

「此処に五枚のカードが有る、一枚がジョーカーで後は普通のカードだ、ターゲットの君と出題者が一枚ずつカードを引いて、どちらかがジョーカーなら：逆に出題者が自分の出した課題を実行する、此は課題の行きすぎを防ぐ為だ。そしてもう一つは、此処に居る者以外のなんびとにも“課題”を知られてはいけない、知られた時は課題を中止する。勿論、懲罰ものだ：ルールは其だけ。」

相田は米倉に向かって説明する様に言うと、ジョーカーが入っている事を米倉に確認させてから、丹念に切ったカードを扇状に広げて差し出した。

「一枚引いて。」

相田が米倉を促す。

米倉はオズオズと一枚のカードを引いて表に反した。

「カードはダイヤの5だ。」

相田はメンバーに知らせる様に言ってから、残りのカードを葉月の方へ示した。

葉月は米倉に向かって

「悪いな、俺は強運だから今迄負けた事が無いんだ。」

と言いながらカードを一枚抜き取って灯りにかざした。

「カードはスペードの8、従って、課題は米倉君が実行する事に決定した。」

相田が皆に向かって言った。「其れで、立会人は誰にする？」

皆川が葉月に尋ねた時

「僕が。」

と、佐理が応えた。

「待て、立会人は出題者が決める事になってるだろ。」

皆川が佐理をたしなめる様に言うと、葉月は皆川を掌で軽く制して「良いだろう、立会人はお前に任せると言った。」

「なら、パートナーを選べ。」

皆川は仕方なしにそう言った。

「聞く迄もなく、相棒は星河…だろ？」

葉月は佐理に同意を求める様に言ってニヤリと笑った。

「はい、そうして頂ければ…。」

佐理はそう答えた。

「決まりだな。」

葉月が皆川に流し目で合図を送り、其を受けた皆川が

「では、異議が無ければ立会人は篠宮と星河に決定する。」

と言ったが、ビジルの会長である葉月の決めた事に逆らう者など居る筈もなかった。

「他に何も無ければ此でお開きにしよう。」

葉月がそう言ったので、暗幕が開けられ、部屋の中に光が取り込まれた。

「其では此で解散する。」

皆川がそう言うと、メンバー達は思い思いに帰り始め、力無く肩を落とした米倉も其に続いた。

ドアの直ぐ側に立っていた佐理は、擦れ違いざま米倉に

「月曜の朝、二時に迎えに行く。」

と、小声で告げた。

その様子を見ていた葉月は

「佐理はちよつと残れ。」

と言った。

希恭は佐理に

「其じゃ、表で待ってる。」

と言って、佐理が頷くのを見ると、先に部屋を出て行った。

他に誰も居なくなると、佐理は葉月の前に歩み寄って

「何か？」

と尋ねた。

葉月は机に腰掛けた俤

「米倉をどう思う？」

と尋ねる

其に対し、佐理は

「別に何とも。」

とだけ答えた。

葉月も

「そうか。」

と言っただけだったが、その視線はじつと佐理に注がれていた。

「一つ質問為てもよろしいでしょうか？」

佐理が唐突に尋ねた。

「何だ？」

「何故、あの様な課題を？」

「お前こそどうしてそんな事を訊く？」

葉月は佐理とゆう人間の機微を一つも見逃すまいとでもするかのように、じつと見詰めた俤聞き返した。

「葉月さんの考えていた課題は、もっと別な事だった様な気がしたので……」

「其から？」

「いえ、只其れだけです……。」

「なら、そんな事お前が気にする必要は無いだろ？」

葉月は皮肉る様に言つてニヤリと笑つた。「申し訳有りません。」  
佐理は軽く頭を下げた。

「謝る必要は無い、其より、もう帰って良いぞ。」

「え…?」

葉月の意外な言葉に佐理は少し怪訝な面持ちだ。

「聞こえなかったのか? 帰って良いと言つたんだぞ。」

「僕に何か用が有つたのでは?」

「別に、只、お前と少し話がしたかっただけだ、其に星河が待つて  
るんだろ?」

「はい。」

「なら、もういい。」

「分かりました、では僕は此で失礼します。」

佐理はそう言つて軽く一礼すると、部屋を後にした。

廊下に出ると希恭が待つていて、空かさず声を掛けて来た

「悪い話し?」

肩を並べて歩きながら希恭が言った。

「いや、只米倉の事を訊かれただけ。」

「米倉の事?」

「ああ。」

「何て?」

「どう思ふつて。」

「其れだけ?」

「そう、其れだけ。」

少し呆れた様な顔をした希恭に、佐理は笑つて答えた。

「何だ、また何時もの気まぐれか…」

希恭が拍子抜けした様に言つたので、佐理は

「あながち、そうとも言えない。」

と言つた。

「ん? そうなのか…?」

「ああ、葉月さんの気まぐれは怖い……」

佐理はそう答えておいてから、少し伏し目勝ちになって

「あの人…俺を試した……。」

と呟いた。「佐理……？」

希恭は佐理の様子に首を傾げた。

（訊くんじゃなかった……）

佐理は課題について葉月に尋ねた事に後悔の念を抱いた。

「俺とした事が、しくじった……。」

佐理がそう言っ眉をしかめた。

「え、何の事だ？」

希恭が尋ねた。

「いや、何でも無い、其より早く帰ろう。」

希恭は佐理の様子が少し気になったが、佐理が笑ってそう答えたのでその場はそれっきりになってしまった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1568b/>

---

【想愛・二人の物語】

2011年1月13日07時41分発行